

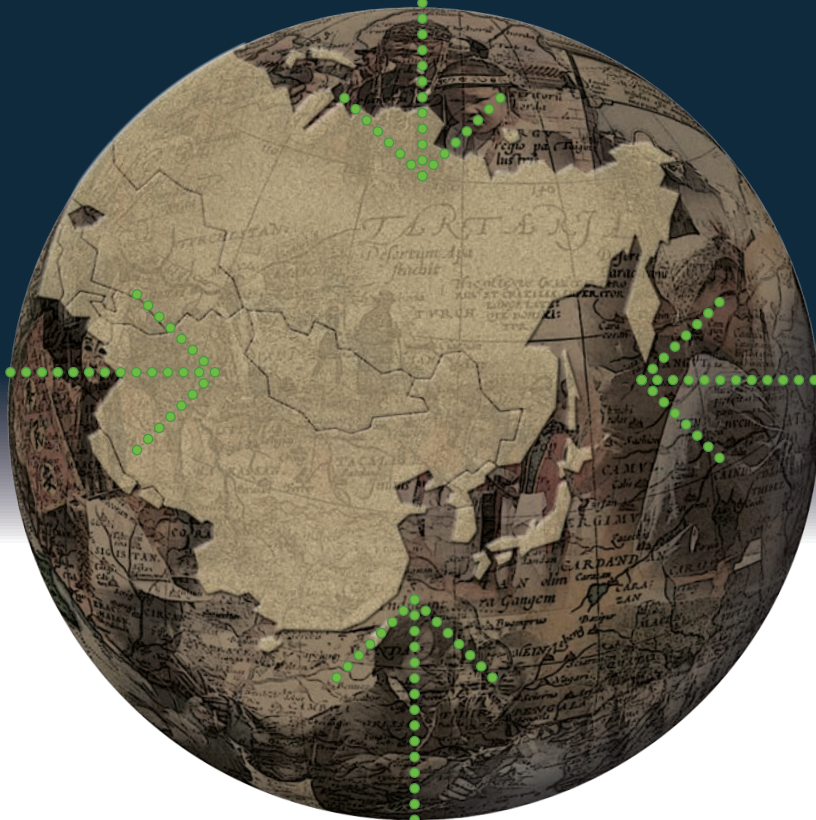


東北大学

東北アジア  
研究センター

# 東北大学 東北アジア研究センター 要覧

Survey and Guide  
Center for Northeast Asian Studies  
Tohoku University





## ごあいさつ

東北アジア研究センターは2021年に設立25周年を迎えようとしています。東北大学の比較的新しい研究所型組織として、文系と理系の研究者が問題意識を共有しながら独自の地域研究を行ってきました。設立目的は、日本に隣接する北方のアジア世界つまり中国・朝鮮半島・モンゴル・ロシアを総合的に理解することにあります。その前身は1962年に設置された文学部附属日本文化研究施設にまで遡ります。



日本にある多くの地域研究機関は、いわゆる外国の広域世界を主要な研究対象にしています。また日本における日本研究は、アジアやヨーロッパと切り分けられた形で日本を理解しようとしています。これに対し、本センターは日本を含めた形で地域研究を行う点に特徴があります。要するに、東北アジア地域のダイナミズムのなかで日本を捉え、また日本のダイナミズムから東北アジア地域を考えるということでもあります。

人文学や社会科学同士、あるいは自然科学同士であっても学際研究はなかなか難しいのが現状です。様々な試行錯誤を繰り返す中で、我々が挑戦可能な学際的なアプローチの領域が見えてきています。例えば20世紀大国比較史、越境環境汚染と移民といった人文社会科学的課題から、北極圏の気候変動とアジア世界、人類の寒冷環境適応と生物地質史といった文理融合的課題です。特に人類史を視野に入れた地域研究は、これまでの我が国では試みがなく、新しい展望を開くことになるのではないかと考えております。また東日本大震災を経験した大学として、災害対応の応用実践的な地域研究にも力を入れています。

私たちのセンターは2020年から外国人研究員の公募を開始しました。東北アジアを研究する諸外国の研究者が仙台に暮らし、じっくりと腰をすえて国際共同研究を行う体制を幅広く構築するためです。公募の成否は、我々の組織が海外の研究者からどのように評価されているかに掛かってきます。我々の研究が面白ければ必然的に新しい人々が近寄ってくるからです。その結果として、センターの国際拠点機能が強化されることを期待しています。

日本社会そして国際社会が必要とするアジア理解を、北方視座のアジア地域研究から提供する東北アジア研究センターが、より大きな役割を果たすべく、研究の深化と成果の世界的発信につとめてまいりたいと思います。

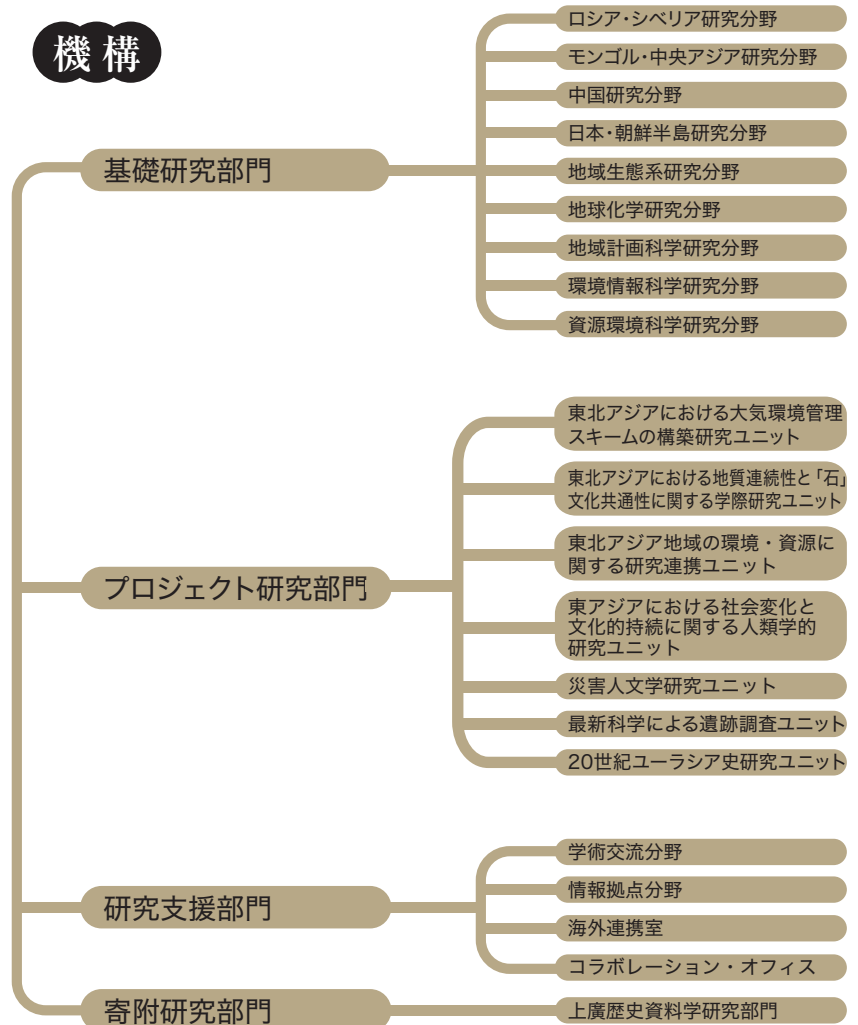
## contents

ごあいさつ	2
東北アジア研究センターとは・機構	3
理念	4
沿革	5
教職員紹介	6
東北アジア研究の最前線	8
共同研究	10
個人研究	12
各種研究員の紹介	26
出版物紹介	27
国際学術交流	28
社会連携	29
データ	30

## 東北アジア研究センターとは

本研究センターは、国立大学法人東北大学東北アジア研究センター規程第二条で「学内共同教育研究施設等として、東北アジア（東アジア及び北アジア並びに日本をいう）地域に関する地域研究を学際的及び総合的に行う」ことを目的として掲げている。その前身は1962年に設置された文学部附属日本文化研究施設であるが、1996年に日本・朝鮮半島・中国・モンゴル・ロシアを総合的に捉える地域研究を設置目的とした全国唯一の研究型組織（部局）として、また人文社会科学と自然科学による学際研究施設として発足した。東北（北東）アジア研究の大学設置研究所型組織としては日本で最大である。

## 機構



## 理念

本センターは、東北アジアという地域理解の枠組みを確立し、普及させることを第一の目的としています。東北アジア研究センターが設立された1996年以後の20年間は、まさに東北アジアが地域枠組みとして実質化していった時代だったと言えます。中国の経済発展と日本・韓国などの結びつき、ロシア、モンゴルのアジア太平洋国家としての再定義と東アジアとの関係構築、そして中国とロシアを中心とする関係調整機構の出現など、今やロシアのシベリア・極東、中国、朝鮮半島、モンゴル及び日本から成る東北アジアは、冷戦時代とは比較にならないほど密接な関係をもっています。北アジア、東アジアといった既存の地域概念では、現今の状況を捉えることができなくなっているのです。しかしわが国では、未だに日中・日露・日韓などといった二国間関係の枠組みでの理解を克服できておらず、日本が東北アジアの一部としてあることも十分に認識されているとは言えないのが実情です。東北アジア地域概念の確立は、わが国にとって急務であると言えます。

地域研究に求められるのは、実践性です。経済発展の中で、東北アジアは今急激な変化を経験しています。変化への戸惑いは、ときに深刻な亀裂を社会に走らせます。開発に伴う環境問題、民族の対立、歴史認識、領土問題などなど、亀裂の露頭はじつに様々な形で現れます。そのような課題を、広域的枠組みにおいて共有することが重要です。一方で東北アジア地域内では、すでに多くのものが共有されています。地域の文化的な価値をどのように評価し、何を残し、何を変えなければならないのか。正負の遺産にどのように向き合うのか。それ

が東北アジア地域研究に求められている課題です。特に重要なのは、研究者と地域住民の協働です。地域研究とは、学者が一方的に分析結果を提示するのではなく、地域住民が継承・創出しようとする文化のあり方をともに考えていくことです。

地域研究への要請は、けっして地域住民の社会・文化の領域にとどまりません。地域の山河も、そこに住む人々が生を営む、人間的な意味づけを与えられた「環境」としてあります。ですから「自然環境」の研究も、地域研究の対象にはほかなりません。地域研究において学際性が要求されるのは、学問が細分化されているからではなく、地域「環境」の多様性とそれに与えられた意味の包括性に起因するのです。

それゆえ東北アジア研究センターは、文系・理系のさまざまな研究分野の連携によって、地域を見つめる多様な視座を確保することをめざします。我々は、高度に専門化し、分厚い蓄積をもつ諸学の成果を有しています。地域研究の学際性とは、専門研究の到達点を安易に否定することではなく、その蓄積を地域理解のために動員し、活用することです。文系・理系の研究者の連携を確保し、諸学がそれぞれの分野で東北アジアを考えることで、地域のより多様な課題を視野に収めることが可能となります。また地域研究者にとって、地域の研究者達の研究成果と向き合いことなくして、研究は成り立ちません。我々が彼等を研究するように、彼等も我々を研究しています。我々には、東北アジアの研究者コミュニティの一員として、そのような双方向性をもった東北アジア地域研究を進めていくことが求められています。

### 歴代センター長

初代	吉田 忠	1996. 5.11 - 1999. 7.31
第二代	徳田 昌則	1999. 8. 1 - 2001. 3.31
第三代	山田 勝芳	2001. 4. 1 - 2005. 3.31
第四代	平川 新	2005. 4. 1 - 2007. 3.31
第五代	瀬川 昌久	2007. 4. 1 - 2009. 3.31
第六代	佐藤 源之	2009. 4. 1 - 2013. 3.31
第七代	岡 洋樹	2013. 4. 1 - 2017. 3.31
第八代	高倉 浩樹	2017. 4. 1 - 現在に至る

### 名誉教授

栗林 均	平成 29 年
磯部 彰	平成 28 年
平川 新	平成 26 年 (退職時の所属部局：災害科学国際研究所)
菊地 永祐	平成 21 年
谷口 宏充	平成 20 年
山田 勝芳	平成 20 年
入間田 宣夫	平成 17 年
吉田 忠	平成 16 年
宮本 和	平成 16 年
徳田 昌則	平成 13 年
佐藤 武義	平成 9 年



1962年4月	文学部附属日本文化研究施設設置(前史)
1996年5月	文学部附属日本文化研究施設廃止(前史)
1996年5月	東北アジア研究センター発足 3基幹研究部門(地域交流、地域形成、地域環境)、2客員研究部門(文化・社会経済政策、資源・環境評価)
1998年5月	東北アジア研究センターシベリア連絡事務所をロシア連邦ノボシビルスク州アカデムゴロドク市に開設
2000年4月	文科省科研費・特定領域研究「東アジア出版文化の研究」(2000～2005年度、磯部彰教授代表)
2001年	センター設置5周年設置記念式典
2002年4月	文科省科研費・特定領域研究「火山爆発にともなう地表面象に対する新研究手法の開発と適用」(2002～2006年度、谷口宏充教授)
2004年	国立大学法人化
2006年	センター設置10周年設置記念式典
2007年	新運営体制構築 基礎研究部門(教員が属する以下の分野:ロシア・シベリア研究分野、モンゴル・中央アジア研究分野、中国研究分野、日本・朝鮮半島研究分野、地域生態系研究分野、地球化学研究分野、地域計画科学研究分野、環境情報科学研究分野、資源環境科学研究分野)、プロジェクト研究部門(教員が兼務する形で組織化する時限付き・学際的・大型プロジェクト)、研究支援部門(学術交流分野、情報拠点分野)
2007年10月	センター内に東北大学防災科学研究拠点事務局を設置(平川新教授代表)
2008年4月	文科省科研費・特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」(2008～2012年度、磯部彰教授)
2009年4月	コラボレーション・オフィス開設
2009年4月	公募型共同研究設置
2009年11月	大学広報課及び文系所部局との協力の下での市民向け学術交流懇談会・リベラルアーツサロン運営開始
2010年9月	東北アジア研究センターシベリア連絡事務所を、東北大学ロシア代表事務所シベリア支部に統合
2012年4月	上廣歴史資料科学研究部門(上廣倫理財団による寄附)設置 2012年4月に東北大学防災科学研究拠点を解散し、東北大学災害科学国際研究所が創設
2015年12月	センター設置20周年記念式典・国際シンポジウム開催
2016年4月	文科省補助事業・北極域研究推進プロジェクトに参画機関として参加(～2020年3月)
2016年4月	大学共同利用機関法人人間文化研究機構・北東アジア地域研究推進事業に参加し、東北大学拠点を設置(～2022年3月)
2017年4月	上廣歴史資料科学研究部門第二期設置(2022年3月迄)
2017年10月	指定国立大学東北大学災害科学世界トップレベル研究拠点事業に参画(2021年3月迄)
2018年3月	大学共同利用機関法人人間文化研究機構・歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業・東北大学拠点運営委員会の参加
2018年6月～ 2019年2月	東北大学知のフォーラム事業「Geologic Stabilization and Human Adaptations in Northeast Asia」



# 教職員紹介 (2020年1月現在)

センター長 たかくら ひろき  
高倉 浩樹

## 基礎研究部門

### ロシア・シベリア 研究分野

教授  
てらやま きょうすけ  
寺山 恭輔  
ロシア・ソ連史 日露・日ソ関係史

教授  
たかくら ひろき  
高倉 浩樹  
社会人類学 シベリア民族誌

助教  
いそがい ますみ  
磯貝 真澄  
歴史学 東洋学 中央ユーラシア近  
現代史 ロシア近現代史

### 兼務教員 (准教授 文学研究科)

かのまた よしたか  
鹿又 喜隆  
考古学

### モンゴル・中央アジア 研究分野

教授  
おか ひろき  
岡 洋樹  
東洋史 モンゴル史

教授  
さの かつひろ  
佐野 勝宏  
先史考古学 実験考古学

准教授  
やなぎだ けんじ  
柳田 賢二  
言語学 ロシア語学  
言語接触の研究

### 中国 研究分野

教授  
せがわ まさひさ  
瀬川 昌久  
文化人類学 華南地域研究

教授  
あすか じゅせん  
明日香 壽川  
環境政策論

准教授  
うえの としひろ  
上野 稔弘  
中国現代史 中国民族学

### 日本・朝鮮半島 研究分野

准教授  
デレーニ アリーニ  
文化人類学 日本民族誌 沿岸文化

准教授  
いしい あつし  
石井 敦  
国際関係論 科学技術社会学

助教  
みやもと つよし  
宮本 毅  
火山岩石学 火山地質学

### 地域生態系 研究分野

教授  
ちば さとし  
千葉 聡  
生態学 保全生物学 進化生物学

助教  
ひらの たかひろ  
平野 尚浩  
進化生態学 軟体動物学 古生物学

学術研究員  
やまざき だいし  
山崎 大志  
進化生態学

### 地球化学 研究分野

教授  
つじもり たつき  
辻森 樹  
地質学 変成岩岩石学

准教授  
ひらの なおと  
平野 直人  
海洋底化学 テクトニクス  
地質年代学 岩石火山学

助教  
ごとう あきお  
後藤 章夫  
火山物理学 マグマ物性

兼務教員 (教授 理学研究科)  
なかむら みちひこ  
中村 美千彦  
火山学 岩石学 地殻流体力学  
兼務教員  
(助教 学際科学フロンティア研究所)  
パストル ガラン ダニエル  
地質学

### 地域計画科学 研究分野

兼務教員 (教授 災害科学国際研究所)  
おくむら まこと  
奥村 誠  
土木計画学 交通計画

### 環境情報科学 研究分野

教授  
くどう じゅんいち  
工藤 純一  
デジタル画像理解学

非常勤講師  
(教授 山形大学理学部地球環境学科)  
やなぎさわ ふみか  
柳澤 文孝  
地球環境学

非常勤講師 (准教授 東北工業大学)  
かわの こういち  
河野 公一  
衛星画像処理 リモートセンシング

非常勤講師 (有限責任会社ミツバルス  
(ロシア現地法人) 責任者)  
いとう まさなお  
伊藤 正直  
ロシア政策論

非常勤講師  
しかの しゅういち  
鹿野 秀一  
生態学

### 資源環境科学 研究分野

教授  
さとら もとゆき  
佐藤 源之  
電磁波応用工学 地下電磁計測

助教  
きくた かずたか  
菊田 和孝  
計測工学

非常勤講師  
(教授 仙台高等専門学校総合工学科)  
そのだ じゅん  
園田 潤  
計算電磁気学

## プロジェクト研究部門

### 東北アジア地域の環境・資源 に関する研究連携ユニット

兼務教員 (准教授 文学研究科)  
やまだ ひとし  
山田 仁史  
神話学 民俗学

特任助教  
キン タン  
金丹  
環境経済 地域研究

学術研究員  
たなか としかず  
田中 利和  
生態人類学

### 東アジアにおける社会変化 と文化的持続に関する人類 学的研究ユニット

兼務教員 (准教授 教育学研究科)  
い いんじや  
李 仁子  
文化人類学 在日移民研究

兼務教員 (准教授 文学研究科)  
かわくち ゆきひろ  
川口 幸大  
文化人類学

### 災害人文学研究ユニット

兼務教員 (教授 文学研究科)  
きむら としあき  
木村 敏明  
宗教人類学 インドネシアの社会と宗教

兼務教員  
(准教授 災害科学国際研究所)  
ボレー セバスチャン ペンメレン

助教  
ふくだ ゆう  
福田 雄  
社会学 災害研究

客員准教授 (非常勤講師)  
(東北歴史博物館 副主任研究員)  
こだに りゅうすけ  
小谷 竜介  
文化人類学

学術研究員  
これつね  
是恒 さくら  
芸術 デザイン工学

### 最新科学による遺跡調査 ユニット

学術研究員  
アハメド アンワー セイド  
アブデルハミード  
電磁波

## 20世紀ユーラシア史研究 ユニット

学術研究員

やくち ひろあき  
矢口 啓朗

19世紀前半のロシア外交史  
国際政治史

## 研究支援部門

### 情報拠点分野海外連携室

助教

ないとう ひろこ  
内藤 寛子

現代中国政治 比較政治

### 企画運営室

学術研究員

おおの  
大野 ゆかり

理論生態学

学術研究員

ほりうち かおり  
堀内 香里

清代モンゴル史

## 寄附研究部門

### 上廣歴史資料学 研究部門

准教授

あらたけ けんいちろう  
荒武 賢一朗

助教

のもと ていじ  
野本 禎司

歴史学 日本近代史 地域史

助教

ふじかた ひろゆき  
藤方 博之

日本近世史 家族史 武家社会論

客員教授（非常勤講師）

（宮城学院女子大学 学長）

ひらかわ あらた  
平川 新

学術研究員

いのうえ るな  
井上 瑠菜

日本美術史

事務補佐員

ごとう みつお  
後藤 三夫

たけうち ゆきえ  
竹内 幸恵

ささき ゆい  
佐々木 結恵

たかはし なおみち  
高橋 直道

あべ さやか  
阿部 さやか

## 客員研究員

チー イン  
斉 英

## 専門研究員

ともだ まさひろ  
友田 昌宏

い そんひ  
李 善姫

## 日本学術振興会 特別研究員

ふじもと けんたろう  
藤本 健太郎

うちだ しょうた  
内田 翔太

いずみ ゆうた  
泉 佑太

たかはし なおこ  
高橋 菜緒子

## 外国人研究員 （客員教授等）

ZHU Mengwen

ジュ ムンウェン  
朱 夢雯

2019.12.2～2020.1.31

香港浸会大学 饒宗願国学院  
ポスドク研究員

## 研究室事務 事務補佐員

まつむら みか  
松村 美加

ロシアシベリア研究分野・高倉研究室

なかい なおこ  
中井 直子

資源環境研究分野・佐藤研究室

## 事務室

事務長

わがつま やすし  
我妻 靖

専門員

たかや としあき  
高谷 敏晶

主任

しみず としかず  
清水 俊和

すずき ともこ  
鈴木 智子

限定正職員（一般）

よこやま なおこ  
横山 尚子

事務補佐員

まえかわ じゅんこ  
前川 順子

おいかわ ふみ  
及川 二美

すずき りえこ  
鈴木 理恵子

## 図書室

事務補佐員

ささき りつこ  
佐々木 理都子

うみぐち おりえ  
海口 織江

## コラボレーション・ オフィス

限定正職員（一般）

はたけやま みつ  
畠山 瑞

事務補佐員

くまがい かおり  
熊谷 香



work 01

災害人文学研究ユニット

代表：高倉 浩樹

文化・民俗・歴史という  
観点からみる  
防災・復興に向けた実践的研究



山元町八重垣神社のお天王様祭り (2012年)



3D スキャナーで三次元計測された獅子頭 (規格品)

東日本大震災以降、被災地域の生活に根ざした民俗芸能や祭りへの注目が集まっています。人文学の研究者は、獅子舞や神楽の復活を後押しする活動を展開してきました。それはこれら無形・有形の文化財が、地域の人びとを結びつけることで、コミュニティ復興への重要な役割を担うからにはほかなりません。災害人文学ユニットは、これら人文諸科学においてこれまで蓄積されてきた災害研究の成果を踏まえ、さらな

る発展と総合化を行います。博物館や文化財研究機関などとも連携し、共同研究を運営するとともに、文化・民俗・歴史を総合的に捉える研究実践と理論開発を行います。特に文化財のデジタル資料化に関わる方法論や映像資料の活用化を積極的に取り組むことで、「災害人文学」という新たな領域を立ち上げるとともに、その実践的研究の牽引的組織・拠点組織となることを目指します。

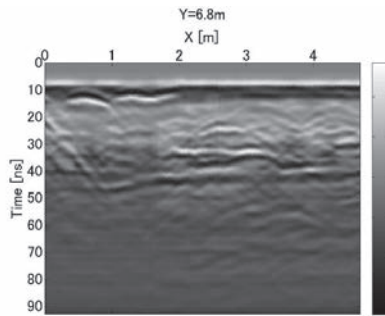
work 02

最新科学による遺跡調査ユニット

代表：佐藤 源之



東大寺大仏殿での探査



地中レーダで見た稲荷山古墳の内部

最新科学技術を駆使した  
遺跡調査の推進

東日本大震災からの復興における住宅の高台移転に伴い、震災地域において遺跡調査を迅速に進めるために地中レーダー (GPR) による調査を地方自治体と進めてきました。GPR は非開削の探査技術であり、遺跡の発見だけでなく発掘に先立ち遺跡状況を把握することで、効率のよい調査が実現でき、また遺跡の破壊を防ぐなど遺跡の保存

にもつながります。私たちは、さきさま古墳、東大寺、瑞巖寺などで地方自治体と協力したエジプトでも先進的な遺跡調査技術を駆使した遺跡調査活動を行い、新たな発見や学術的に貴重な情報を提供してきました。一方で遺跡調査技術には GPR だけでなく GNSS による高精度測位技術、写真から 3 次元立体像を再現する技術など新しい技術が導入されてきています。こうした科学技術の積極的な利用が遺

跡の保存活動につながります。従来の発掘による遺跡調査を効率的に進める観点からも新技術の導入の意義は高いと考えています。本ユニットでは東北大学が開発した新しい地中レーダー計測手法 (アレイ型 GPR) を利用した遺跡調査技術を主軸に、それ以外の科学技術手法を含め地方自治体の遺跡探査へ実践的な技術協力・技術指導する事業を推進していきます。



## 20 世紀ユーラシア史研究ユニット

代表：上野 稔弘

# 一国史研究の枠を越えた 20 世紀ユーラシア史研究の模索

本ユニットはユーラシア世界の二大国である中国とロシアを対象地域の核に、その周辺国・地域をも対象に加え、未解明の部分が依然多い辺疆交界地域や複数国に跨がる課題を共同で分析することにより、一国史研究の枠を越えた「ユーラシア史研究」を模索する。主たる対象時期を一次史料の公開が進行・拡大している 20 世紀前半期とし、これに一次史料の公開が本格化しつつある冷戦期も分析対象に含める。本ユニットはこうした枠組みの下に中ロ両国を核とする 20 世紀ユーラシアに関心を抱く歴史研究者が、諸課題に関する一次

史料の情報を交換・共有しつつ協力して解明を進め、その成果を社会還元するための活動拠点を形成し、中ロ二大国が影響力を発揮するユーラシアの現況に対する歴史的背景の理解に資することを旨とする。



國史館新店館（台湾）



ロシア国立社会政治史文書館





## 共同研究

### 2018年度東北アジア研究センター・プロジェクト研究ユニット、共同研究一覧（2018年7月現在）

プロジェクト研究ユニット		
代表者	ユニット名	年度
明日香 壽川	東北アジアにおける大気環境管理スキームの構築研究ユニット	2014-2019
辻森 樹	東北アジアにおける地質連続性と「石」文化共通性に関する学際研究ユニット	2016-2020
岡 洋樹	東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット	2016-2021
瀬川 昌久	東アジアにおける社会変化と文化的持続に関する人類学的研究ユニット	2017-2020
高倉 浩樹	災害人文学研究ユニット	2017-2022
佐藤 源之	最新科学による遺跡調査ユニット	2018-2022
上野 稔弘	20世紀ユーラシア史研究ユニット	2018-2020
2018年度共同研究継続課題		
代表者	課題名	年度
明日香 壽川	中国における新しい石炭政策が大気汚染および温暖化を緩和する可能性	2014-2019
石井 敦	北東アジアにおける日本のソフトパワー	2016-2018
高倉 浩樹	東日本大震災後のコミュニティ再生・創生プロセスと持続可能性に関する実証的共同研究	2016-2018
千葉 聡	遺跡にみる生物多様性研究	2015-2017
岡 洋樹	東北アジア辺境地域多民族共生コミュニティ形成の論理に関する研究	2015-2018
平野 直人	根室半島～歯舞群島・色丹島の前弧マグマがもたらす地域環境システム	2017-2018
瀬川 昌久	族譜編纂活動における現代中国人の歴史意識の研究	2017-2020
後藤 章夫	蔵王火山の活動の熱的・地球化学的モニタリング	2017-2019
岡 洋樹	東北アジア諸地域における清朝統治の歴史的意味に関する比較研究	2017-2019
川口 幸大	移動と流行：移民がもたらしたもの／持ち帰ったもの	2017-2019
佐藤 源之	地中レーダによる遺跡探査の推進	2017-2019
柳田 賢二	オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究	2017-2019
宮本 毅	南三陸・仙台湾地域を対象とした次世代ジオツーリズムの構築	2017-2019
2018年度共同研究新規課題（センター内分）		
代表者	課題名	年度
内藤 寛子	自然災害の発生による政治・社会構造の変容に関する比較研究	2018-2018
2018年度共同研究新規課題（外部公募分）		
代表者	課題名	年度
辻 貴志	東北アジアを中心としたアジア地域における動物資源利用問題と「人間性」 - 生業、娯楽、奢侈の観点から -	2018
洪 惠媛	東北アジアの地質的多様性に対する「石」文化の技術的適応	2018
高山 陽子	規範と模範：東北アジア地域における近代化と社会共生	2018

### 〈2018年度獲得科研費一覧〉

No.	研究種目	代表者氏名	職名等	研究課題名	課題番号
1	基盤研究 (A)	佐藤 源之	教授	圧縮センシングと最適空間サンプリングによる地雷検知用レーダ・イメージングの効率化	26249058
2	基盤研究 (B)	岡 洋樹	教授	東北アジア辺境地域多民族共生コミュニティ形成の論理：中露・蒙中辺境に着目して	15H03128
3	基盤研究 (B)	辻森 樹	教授	プレート境界岩の未読情報総合解析：局所同位体比分析によるプロセスと経年変化の理解	18H01299
4	基盤研究 (B)	千葉 聡	教授	過去はどこまで今を制約するのか：海洋島陸貝群集をモデルとして	18H02506
5	基盤研究 (B)	柳田 賢二	准教授	オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究	16H05657
6	基盤研究 (B)	寺山 恭輔	教授	スターリン統治下のソ連極東に関する基礎的研究	17H04502
7	基盤研究 (B)	千葉 聡	教授	脅威が創出する多様性：ロシアとベトナムに見る進化爆発	17H04611
11	基盤研究 (C)	明日香 壽川	教授	パリ COP21 の結果を踏まえた各国の温室効果ガス削減目標および政策の分析評価	16K00669
12	基盤研究 (C)	友田 昌宏	専門研究員	幕末維新期における情報ネットワークと思想形成ー東北諸藩土を素材としてー	17K03091
13	基盤研究 (C)	高倉 浩樹	教授	津波被災地の地域農業・漁業復興における在来知と災害リスク軽減研究	17K03270

# 2018 年度競争的資金による研究プロジェクト



No.	研究種目	代表者氏名	職名等	研究課題名	課題番号
14	基盤研究 (C)	平野 直人	准教授	海底岩石から直接読み解く沈み込むプレートの変動履歴	17K05715
15	基盤研究 (C)	磯部 彰	名誉教授	戦国武家の家門形成に果たした漢籍の役割研究 - 子部・集部の蒐集を中心に -	18K00345
16	基盤研究 (C)	栗林 均	名誉教授	音声データベースに基づくモンゴル系諸言語の史的変化の研究	18K00521
17	基盤研究 (C)	瀬川 昌久	教授	現代中国人の歴史意識に関する研究—族譜編纂活動の分析から	18K01163
18	基盤研究 (C)	李 善姫	学術研究員	加齢・高齢化する結婚移住女性たちのケア環境とモビリティに関する研究	18K01185
19	基盤研究 (C)	石井 敦	准教授	先見的ガバナンスとしての国際漁業資源管理：その導入における学習の要因分析	18K01459
20	若手研究 (B)	田中 利和	学術研究員	アフリカによる労働履物の創造に関する実践的地域研究：新たな地下足袋文化の探求	16K16662
21	若手研究 (B)	井上 岳彦	日本学術振興会特別研究員 (PD)	ロシア帝国内のチベット仏教徒と南・東南アジアの民族知識人に関する研究	16K20880
22	若手研究	福田 雄	助教	災害遺構の比較社会学—東日本大震災とスマトラ島沖地震を事例として	18K12916
23	研究活動スタート支援	内藤 寛子	助教	歴史的制度論から見る中国共産党と人民法院の領導関係の変容	16J04692
24	研究成果公開促進費 (データベース)	工藤 純一	教授	越境大気汚染衛生画像データベース	16J06051
25	特別研究員奨励費	齊藤 匠	日本学術振興会特別研究員 (DC)	形態の変化が適応放散に至るまでの経時的進化機構の解明	16J04692
26	特別研究員奨励費	大石 侑香	日本学術振興会特別研究員 (PD)	漁撈—牧畜論の構築：シベリア北方少数民族の生業複合論再考	16J06051
27	特別研究員奨励費	井上 岳彦	日本学術振興会特別研究員 (PD)	ロシア帝国の仏教研究と対アジア政策の関係について	16J07002
28	特別研究員奨励費	内田 翔太	日本学術振興会特別研究員 (DC)	生物の侵入によって変化する種間相互作用の解明	17J05620
29	特別研究員奨励費	泉 佑太	日本学術振興会特別研究員 (DC)	多偏波干渉地上型合成開口レーダを用いた植生下における高精度地表変動解析手法の開発	18J20104
30	特別研究員奨励費	辻森 樹	教授	超海洋パンサラッサ—古テチス海インタフェイスのテクトニクス復元	16F16329
31	特別研究員奨励費	高倉 浩樹	教授	グローバルな資源利用の動態によるローカルな持続性挑戦への影響：モンゴルの事例	17F17002
研究代表者分 小計					

※年度途中で転出又は廃止となった課題は、転出又は廃止となった年度の当初に交付決定又は基金支払を受けた額により計上している。

## 〔科研費以外の外部資金一覧 (2018 年度)〕

名称・題目		研究者	
民間等との共同研究			
1	土木工事における GB-SAR を用いた動態観測の検討と適用	佐藤 源之	教授
2	地中レーダ技術の農業への応用	佐藤 源之	教授
3	LA-ICPMS 局所 Sr-Pb-Li-B 同位体組成分析による海洋プレートが沈み込み変成作用を被る過程の元素挙動の総合研究	辻森 樹	教授
受託研究			
1	SIP(戦略的イノベーション創造プログラム) インフラ維持管理・更新・マネジメント技術／モニタリングシステムの現場実証／地上設置型合成開口レーダおよびアレイ型イメージングレーダを用いたモニタリング	佐藤 源之	教授
2	「北極域研究推進プロジェクト 人文・社会科学研究分野」	高倉 浩樹	教授
3	設置型合成開口レーダ (GB-SAR) の斜面監視への適用性に関する研究	佐藤 源之	教授
4	荒砥沢ダム崩落地安全対策モニタリング事業	佐藤 源之	教授
受託事業			
1	北東アジア地域研究推進事業	高倉 浩樹 外	教授
寄附金			
1	上廣歴史資料学研究部門 (寄附講座)	平川 新 (兼務)	客員教授
2	小笠原諸島産陸産貝類の保全研究推進に関する寄附金	千葉 聡	
3	小笠原諸島に侵入した特定外来生物グリーンアノールの防除に関する寄附金	千葉 聡	
4	一般財団法人東北開発記念財団平成 30 年度 (後期) 海外派遣援助	是恒 さくら	学術研究員

## ロシアの東方から スターリン体制の 深化・発展を考察する

中国共産党の一党支配、南北朝鮮の分断など現代の東北アジア情勢の理解には第二次大戦前の時代に遡り歴史を検証する必要がある。ソ連のスターリン体制がこの地域に及ぼした影響は、北方領土問題はいうまでもなくきわめて重大である。一方で、このスターリン体制の深化・発展は内的要因だけでは説明できない。日本による『満洲国』樹立に対抗して新疆、モンゴルの状況に深く介入していく過程についてまとめたが、これは戦後の冷戦、東欧への勢力圏拡大を理解するための先行事例として有益だろう。現在、ソ連東部における物的・人的な総動員体制の確立、中央による極東地方の集権的統治の実態について、モスクワのソ連共産党、政府、軍、外務省等の中央の公文書館、極東やシベリアの公文書館で収集する一次史料をもとに研究を進めている。



寺山 恭輔教授  
てらやま ● きょうすけ  
ロシア・ソ連史 日露・日ソ関係史



ソ連時代のプロパガンダポスター

### 《主な研究テーマ》

- スターリン時代を中心とするソ連政治史の研究
- 日ソ関係の研究
- ロシア・ソ連国境における民族政策（フィンランド、ポーランド、新疆、モンゴル）に関する研究
- ブーチン時代の現代ロシア政治に関する研究
- ロシア、ソ連の検閲に関する研究

## 北極圏先住民の狩猟牧畜適応への 環境人類学的分析と応用映像実践

ロシアを理解するためには、ユーラシア大陸北部の大半をしめるこの国家に、現在200近くの民族集団が暮らしていること、かつて中央アジア及びアラスカにまで広がる植民地を持っていた歴史を視野に入れなければならない。シベリアは、この点で現在においても内国植民地である。そこは、数多くの先住民族が暮らす空間であると共に、豊富な天然資源を基盤にした経済開発が進行する地域だからである。シベリアの人類学の射程は、こうした民族・宗教問題を含めたロシアの社会文化的文脈の発掘に向けられている。と同時に、北極圏を含む厳しい環境のなかで住民が構築してきた生態学的適応の文化的側面に肉迫する。



高倉 浩樹教授  
たかくら ● ひろき  
社会人類学 シベリア民族誌



ロシア・ベルホヤンスク山脈東麓のエヴェン人牧夫がトナカイを捕獲する

### 《主な研究テーマ》

- 北極狩猟牧畜の生態人類学的研究
- 映像・展示を用いた公共人類学
- スラブ・ユーラシア世界におけるナショナリズムと先住民運動
- 北極の温暖化と地域社会
- 環オホーツク海域の歴史人類学
- 文化遺産と災害対応

## ロシアのヨーロッパ部における テュルク系ムスリム社会の歴史学的研究

ロシアのウラル山脈以西はヨーロッパ部ロシアと呼ばれ、そのヴォルガ川中・下流域とウラル南麓はヴォルガ・ウラル地域と言われる、歴史的なテュルク系ムスリムの居住地域である。そうした人びとのほとんどは現在、タタール人、バシキール（バシコルト）人であるが、彼らがムスリムとして形成していた歴史的社会的様相を解明する研究を進めている。ヴォルガ・ウラル地域がロシアのなかでも特に多民族・多宗教（宗派）的な性格を有する地域の1つであることから、その環境における「普通の」ムスリムの社会生活、家族生活がどのようなものであったかを明らかにしたいと考える。こうした研究関心の持ち方と研究課題は、ロシアにおいて自国の「多民族・多宗派国家」性が強調される現在、意義のあるものと考えている。

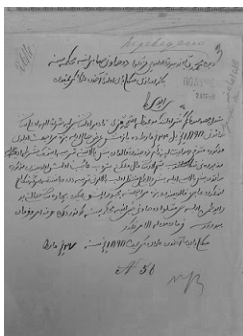


磯貝 真澄 助教  
いそがい ●ますみ

歴史学 東洋学  
中央ユーラシア近現代史  
ロシア近現代史



ロシア連邦バシコルトスタン共和国ウファ市の第1集会モスク



19世紀末にヴォルガ・ウラル地域のウラマーが作成した報告書

### 《主な研究テーマ》

- ロシア帝国のムスリム統治制度のもとでの、イスラーム法の専門家としてのウラマーの研究
- ムスリム社会におけるイスラーム家族法に由来する規範の適用をめぐる、法制度史・法社会史的研究
- 20世紀初頭のロシアのムスリム言論界でウラマーが展開したイスラーム改革論の研究
- 中央ユーラシア（特にヴォルガ・ウラル地域と中央アジア）におけるウラマーの人的ネットワークとイスラーム法、イスラーム教育の研究
- ソ連初期におけるウラマーの活動の研究

## 東北アジア地域における モンゴル遊牧民社会の歴史的研究

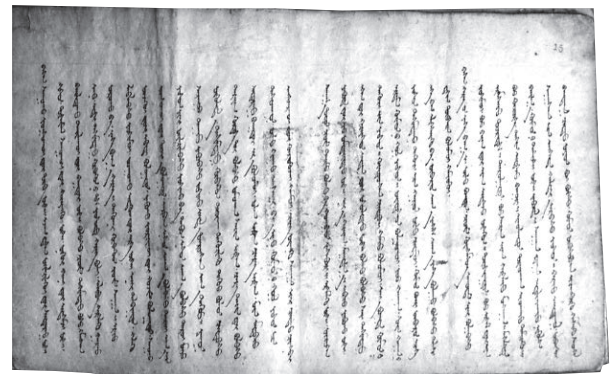
遊牧生産を基盤とするモンゴルの歴史的社会的構成は、清代の社会・統治枠組の基盤の上に、社会主義期による近代化を経て、現在に至っている。モンゴル史において、300年近くに及ぶ清朝の支配は、近代における様々な歴史事象展開の基盤となった。従って、モンゴルの現在を理解する上で、清代は重要な意義を有する。かかる観点から、以下の研究を進めている。

- 1.モンゴルにおける前近代基層社会構造の研究。とくに清代の盟旗制度や王公制度による統治の歴史的 성격の解明。
- 2.清代を中心としたモンゴルをめぐる人の移動、社会変容の様態解明。また人の移動に関わる清朝の政策展開とモンゴル社会の変容。
- 3.モンゴル史をめぐる歴史記述の研究。とくに清代から近代におけるモンゴルの歴史記述史が東北アジアの近代化と近代的歴史認識に占める位置、役割の研究。



岡 洋樹 教授  
おか ●ひろき

東洋史 モンゴル史



ブレヴジャヴ布告文

### 《主な研究テーマ》

- 清代モンゴルの社会構造の研究
- モンゴルを中心とした東北アジアの人の移動と共生の様態
- 清代～近代モンゴルの歴史記述

## 人類の進化と拡散の歴史を復元する

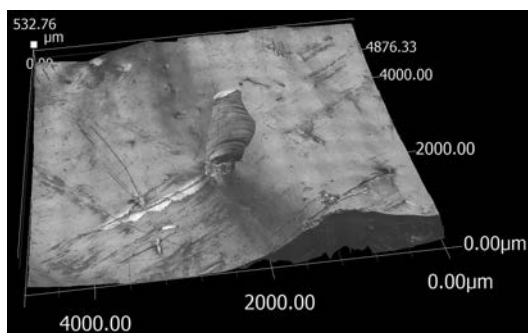
我々ホモ・サピエンスの生物学的特性を理解するため、人類進化と道具の製作・使用体系の発達史に関する研究を進めている。特に、ユーラシア大陸に拡散したホモ・サピエンスが、各地にいた先人類と交替し、人口増加を可能にした背景を探っている。現在、この原因の一つに狩猟技術の発達があったと考え、投槍器や弓矢を用いた複合的投射技術の起源と拡散プロセスについて研究している。



佐野 勝宏教授  
さの●かつひろ  
先史考古学 実験考古学



ロシア・アルタイのウスチカン洞窟。ネアンデルタール人の遺跡



後期旧石器時代の黒曜石製石器に観察された微細衝撃線状痕(左下から右上に向かって走る)。この石器が、狩猟具として使われた証拠となる。

### 《主な研究テーマ》

- 人類の進化史
- ホモ・サピエンスの東北アジアへの拡散
- 狩猟具の投射技術の発達
- 実験痕跡研究

## 中央アジア諸民族間共用語としてのロシア語の特徴と変容の研究

中央アジアでは様々な民族がモザイク状に住み、言語の境界と国境線は一致しない。ソ連崩壊後28年を経ても多様な民族間の唯一の共通語として機能しているのはロシア語であり、それは民族語とのコードスイッチングという文脈で用いられる。現在、脱ロシア化・民族主義化の傾向に加え経済不振による教育の貧困化によりロシア語を解さない民族語単一話者の比率が高まっているが、それは同時に言葉の通じない同国人の増加でもある。中央アジアのロシア語がこの状況下でいかなる特徴を持ち、いかに変化するのか、今後いかなる地位を得るのか、あるいは衰退して消滅に至るのかを現地調査に基づき研究している。



柳田 賢二准教授  
やなぎだ●けんじ  
言語学 ロシア語学 言語接触の研究



中国語北方方言由来の言語を話すドゥンガン人の「文化の日」。キリル字で「文化」という語が書かれている。

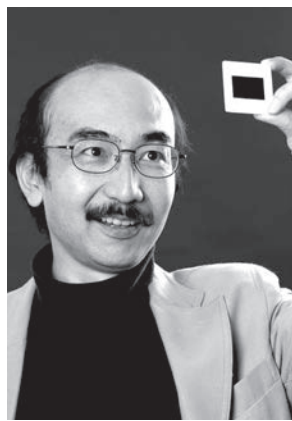
### 《主な研究テーマ》

- 言語接触と言語変容に関する研究
- 多言語使用とコードスイッチングの研究
- 現代ロシア語に関する音声学・音韻論的研究

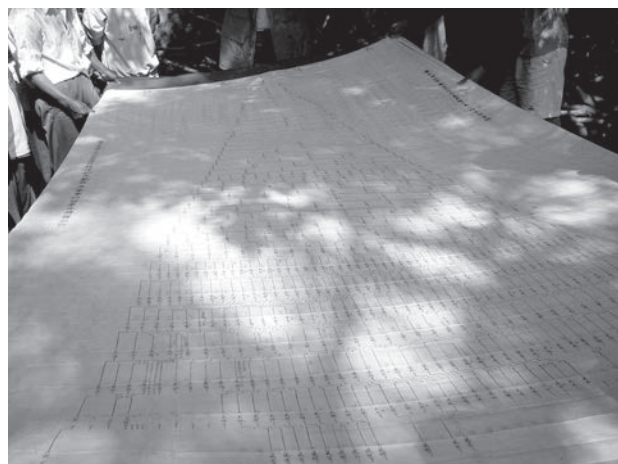
Division of Chinese Studies

現代中国における親族組織・  
宗族（そうぞく）の復興現象と  
それが意味するもの

改革開放政策以降の中国南部農村に続々と復興した宗族（そうぞく）組織。父系の親族が集落をつくって集居し、ともに祖先の墓や位牌を祭る。それは一見、高度経済成長を続ける現代中国には不釣り合いなアナクロニズムにも思えるが、近年の経済発展で得た富の社会的名声への変換、文革時代に破壊された人間関係の修復、あるいは中華文明の悠久の歴史と自己の祖系を同一視しようとする愛国主義的思潮など、多様に現代的な意味づけを施され再解釈された宗族の姿がそこには見いだされる。こうした現代中国の隠れた一面を、現地でのフィールドワークに基づく個別具体的な事例分析から明らかにする。



瀬川 昌久教授  
せがわ ● まさひさ  
文化人類学 華南地域研究



系譜を広げる（海南省儋州市）

《主な研究テーマ》

- 親族関係と社会組織
- エスニシティ
- 華南地域研究

制度設計および国際協力の  
側面から研究する環境問題  
およびエネルギー問題

環境問題およびエネルギー問題に関して、その実態および歴史的経過を解明するとともに、どのような対策が必要であり、かつ技術的・政治的に可能であるか等の問いについて総合的かつ多角的に研究を行う。特に、地球温暖化問題や越境汚染問題のような様々なステークホルダー間の合意が必要な問題に関して、環境税や排出量取引などの具体的な制度設計を中心に、諸外国および日本における具体例を参照しつつ、政治学、経済学、社会学、法哲学などの社会科学の側面から定性的・定量的に検討する。



明日香 壽川教授  
あすか ● じゅせん  
環境政策論



2000年オランダハーグで開催された:気候変動枠組み条約締約国会議  
(Photo courtesy of Leila Mead/IISD 撮影)

《主な研究テーマ》

- 地球温暖化問題
- エネルギー転換
- アジア諸国の環境問題およびエネルギー問題
- 越境汚染問題
- 国際環境協力
- カーボン・プライシング
- カーボン・リーケージ、企業の国際競争力
- 環境金融
- クライメート・ジャスティス

## 文献考証とフィールドワークで 分析する多民族国家中国の近現代

東北アジア地域にはさまざまな民族集団が存在し、広範な領土を有する中国も多民族国家という側面を持っている。帝国体制の終焉によるゆるやかな地域統合の解体から国民国家建設を通じての領域的・人的再統合に向かうという近現代中国の歴史的流れの中で、諸民族の統合は重要な問題の一つであり、また今日にいたるも依然重要性を帯びている。こうした近現代中国における民族問題について、国内外で所蔵されている文献資料の収集・分析とフィールドワークによる実態理解という手法を組み合わせることで、東北アジアの多民族社会に対する理解を一層深め、さらには東北アジアの民族共生に貢献することを目指す。



上野 稔弘准教授  
うえの●としひろ  
中国現代史 中国民族学

## 東北アジア地域の重要な食料である 漁業資源の国際管理を評価する

東北アジアだけでなく、海を持つ国の多くの人々は漁業資源を主なタンパク源として食している。今では、日本だけでなく、中国、台湾、韓国などが世界の主要な漁業国となっている。その漁業資源の国際管理は多くが失敗に終わっている。それは漁業資源の多くが非排他性・競合性を特徴として持ち、いわゆる「共有地の悲劇」が起こっているからである。研究テーマとしては、漁業資源の中でもとりわけ乱獲の恐れがあるマグロに焦点をあて、その「共有地の悲劇」をもたらしている交渉の要因、そして、失敗といっても、どこがどの程度失敗しているのか、といったことを明らかにしていこうと思っている。



石井 敦准教授  
いしい●あつし  
国際関係論 科学技術社会学



復元された中国の歴史的景観 (北京)



畜養された大西洋クロマグロを生簀から引き上げている(マルタ)。畜養とは、クロマグロの幼魚を捕獲して、生簀で人工的に太らせる、つまり、人工的に「全身大トロ」にする養殖の一種です。

### 《主な研究テーマ》

- 中国近現代の国民国家建設過程における民族統合問題の研究
- 中国における民族関係の形成とその変遷の研究
- 東北アジア地域における諸民族の社会的動態とその民族的アイデンティティの研究

### 《主な研究テーマ》

- 超学際科学
- 科学技術社会学と国際関係論の融合(外交科学)
- 炭素隔離技術の社会的側面
- 越境性酸性雨問題における国際交渉・環境協力(欧米アジア)
- 国際環境レジームにおける科学アセスメント
- 国際漁業資源ガバナンス



## 沿岸社会の社会的持続性

Coastal people have a connection to the places they live and work. The environment informs their culture, just as their cultures impact the manner in which they relate to their local environment. To understand coastal communities and cultures, one has to know history, economics, and the local environmental conditions, in addition to their cultural attributes. I conduct long-term, ethnographic fieldwork in coastal Japan and research how people interact with the environment (e.g., organize themselves to manage resources; conduct rituals related to their connection with the sea, etc.) I have had the benefit of watching society and the environment change (e.g. demographic changes; disasters) around them. This, as an extension of my early work on personal autonomy and identity stemming from a drop in fishing population numbers, has led me to focus on the themes of social sustainability and resilience.



**DELANEY Alyne** 准教授  
デレーニ アリーン  
Cultural Anthropology, Japanese ethnography, coastal cultures



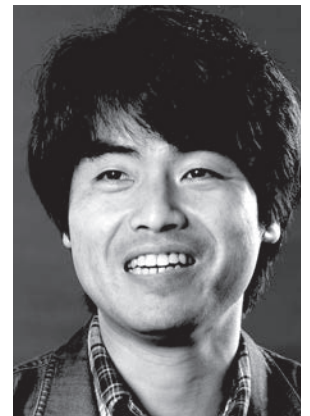
Couples working together on summer tasks, Shichigahama, Japan



Subsidence in Toguhama Port following the Great East Japan Earthquake (3.11)

## 東北アジア地域の火山の噴火史とその影響を研究する

火山噴火が発生した場合には周辺地域に多大な災厄がもたらされる。東北アジア地域には複数の火山が存在するが、噴火が自然界(人類史)に与える影響を知るためこの地域において過去にどのような火山活動が行われてきたかを、有史後に噴火したとされる中国・北朝鮮国境上の白頭山、東北、南九州の火山を対象とした研究を行っている。特に10世紀に大陸と日本で同時期に発生した白頭山と十和田湖の2つの大規模噴火に焦点をあて、中国・北朝鮮領内及び日本国内でのフィールド調査を通じて噴火の推移や、噴火がもたらした自然界への影響(例えば環境変動)について検討し、次第に噴火の全貌が明らかになりつつある。



**宮本 毅** 助教  
みやもと ●つよし  
火山地質学 火山岩岩石学



西側山頂から見た白頭山天池カレデラ。対岸中央部に中朝国境が位置し、右が北朝鮮領。(長瀬敏郎撮影)

### 《主な研究テーマ》

- Environmental anthropology of coastal cultures, including Japan
- Social Sustainability and community resilience
- Natural resource management and governance
- Disaster Anthropology
- Visual Anthropology

### 《主な研究テーマ》

- 白頭山10世紀巨大噴火の噴火推移の解明
- 十和田火山の噴火過程の解明
- 島弧火山(日本地域)におけるマグマ発達史
- 南三陸ジオパーク実現へ向けてのジオガイド養成プログラムの構築

## 東北アジア生物多様性研究

生物に多様性が生まれ維持される仕組みを理解することにより、その価値と機能を知ることができる。そして生態系の未来予測と適切な管理のための方法を開発することができる。生物多様性は現在、グローバルな環境変化、開発による生息場所の喪失、外来種の侵入などにより、急速な減少に直面しているが、特に東北アジア地域の生態系は、急速な経済発展により現在世界で最も危機にさらされている生態系である。この地域の生態系の価値を明らかにすることは、急務の課題である。東北アジア地域の生物多様性の実態を解明すること、そしてその保全に貢献することを目指して研究を進めている。



千葉 聡教授

ちば●さとし

生態学 保全生物学 進化生物学



内モンゴルでの湿地生態系調査

## 種多様性創出機構のメカニズム解明

環境の変化やそれに伴って生じる生物間相互作用に着目し、遺伝的多様化・表現型多様化のメカニズムについて研究しています。進化生態学をベースとし、生態学・分子生物学・古生物学を組み合わせた学際的な視点で、様々な仮説を検証しています。そのための研究モデルとして、生態や環境を反映し化石として残る殻・性的な相互作用に関連する生殖器など、多様な表現形質をもつ軟体動物や、その捕食者である昆虫類・魚類を扱っています。



平野 尚浩助教

ひらの●たかひろ

進化生態学 軟体動物学 古生物学



石灰岩地における固有陸産貝類の産地

### 《主な研究テーマ》

- 島嶼生物学
- 東北アジア生態系の保全
- 多様性進化のプロセス

### 《主な研究テーマ》

- 陸産貝類の種多様化の歴史と要因についての研究
- 閉鎖系における進化研究
- 古生物学からせまる軟体動物の進化史研究
- 保全上の問題解決に向けた研究と具体策

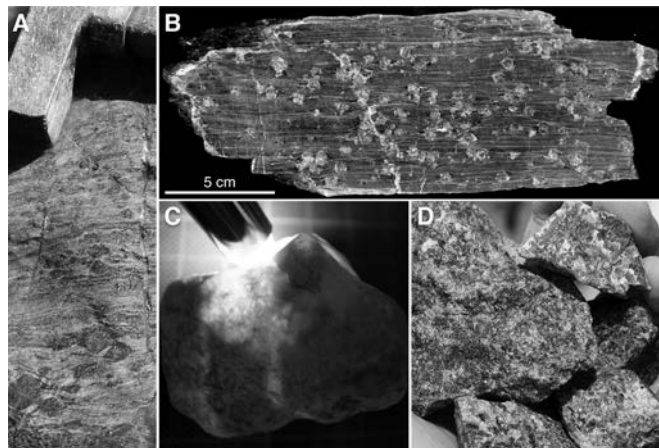
Division of Geochemistry

プレート収束域の変成流体が関与する地学現象（鉱物間の反応～造山運動の時間・空間スケール）の包括的理解

地球史を通して、プレート収束域は大陸地殻を成長・改変させ、それと同時に地殻物質を地球深部（マントル）へ供給する物質循環拠点の役割を果たしてきた。とりわけ新生代以降の造山帯に出現する藍閃石、ローソン石、ひすい輝石、コース石を含む高圧・超高压変成岩は、地球内部の冷却に伴ってプレート収束域の地温勾配が十分に下がった直接証拠である。東北アジアや還太平洋地域の変動帯など、過去のプレート収束域で形成した変成岩・交代岩を直接解析することは、プレート収束域の地学現象を包括的に理解する上で重要であって、惑星「地球」の未来予想という視点においても地球惑星科学の挑戦である。



辻森 樹教授  
つじもり●たつき  
地質学 変成岩岩石学



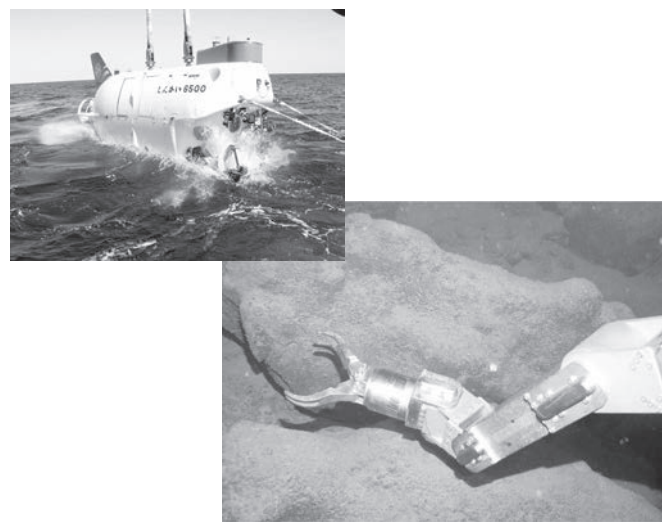
A) ローソン石エクロジャイト、B) ざくろ石青色片岩、C) ひすい輝石岩、D) 宝石質コランダム(ルビー)

新種の火山・プチスポットの成因と地球の二酸化炭素放出量

沈み込む海洋プレートの屈曲場で活動し、2006年に三陸沖で発見された新種の火山(プチスポット)は、近年チリ沖や西太平洋の深海底でも続々と見いだされている。このような深海底は、古いプレートで構成されているため、これまでは火山活動が起こり得ない場所と考えられていた場所である。同火山は、カムチャツカ沖、日本海、極東ロシアなどにも存在している可能性があり、それらの噴出物から放出される成分によっては、地球の二酸化炭素放出量をも再考する必要がある。また、過去の海洋底が現在陸上に露出する場所(根室、歯舞、サハリンなど)の調査も進めている。



平野 直人准教授  
ひらの●なおと  
海洋底科学 テクトニクス 地質年代学



潜水調査船「しんかい6500」と、岩石試料採取の様子。(海洋研究開発機構、米科学振興協会提供)

《主な研究テーマ》

- プレート収束域の変成流体の役割の理解
- 新生代～顕生代の造山運動と地球変動史
- 東北アジアの高圧・超高压変成帯のテクトニクス
- 変成岩研究の体系化、日本列島地質構造発達史の体系化
- 硬玉翡翠(ひすい輝石岩)の文理融合型総合研究の創成

《主な研究テーマ》

- 海底火山および付加体中の火山岩の成因解明
- 新種の火山・プチスポットの二酸化炭素放出量
- 新種の火山・プチスポットの世界的普遍性
- 西太平洋プレート上の海山群の形成史

## 岩石や地質の記録から過去の大陸分布を復元

The Earth has written its own history in thousands of rock pages, the geological record, which contains evidence of the evolution and interactions of continents, oceans, atmosphere, and biosphere. Despite the rock archive is really dismembered, scattered and hidden in remote places or deeply buried, gathering the pieces together is our only opportunity to reveal the history of our planet, our history. I am a researcher who works in Plate Tectonics, orogenesis, Earth history and paleogeography combining field geology, paleomagnetism, isotopic methods (U-Pb, Ar-Ar, Lu-Hf, Sm-Nd, O and H) and modeling (numerical and analog).



**PASTOR-GALAN Daniel** 助教  
バストルガラ ダニエル  
地質学



カリフォルニア



スコットランド Lewisian 岩体(下)での調査

### 《主な研究テーマ》

- Plate Tectonics
- Orogenesis
- Paleogeography
- Earth History

## 火山噴火の特徴を決める要因を実験や観測をもとに研究する

日本やカムチャツカをはじめ、東北アジア地域には多くの活火山が存在する。火山噴火の特徴はマグマの性質に大きく左右される一方で、同じようなマグマで異なるタイプの噴火が起こったり、さらには同じ火山で時間とともに噴火の様子が変わるなど、その個性が何に支配されているかは必ずしも明らかでない。この謎を解明するために、マグマの物理的性質の測定や、噴火を模擬した実験、また実際の火山で噴火の観測を行っている。得られた結果は、噴火様式と周囲への影響の関係を明らかにし、日本のような人口密集地域での防災に役立つと期待されている。



**後藤 章夫** 助教  
ごとう あさお  
火山物理学 マグマ物性



北海道有珠火山金比羅山火口で発生した、ジェットを伴う水蒸気爆発

### 《主な研究テーマ》

- マグマの物理的性質の測定
- 火山爆発模擬実験
- 空振観測

Division of Environmental  
Information Science

人工衛星を使って  
ロシア極東・シベリアの  
環境問題を解明

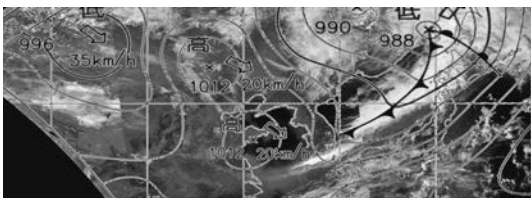
地球温暖化の原因とされている二酸化炭素を大規模森林火災の管理により大幅に削減する構想をロシアの森林火災を事例として、火災の早期発見方法の開発を行っている。一方では、PM2.5を含む越境大気汚染や黄砂の実態を可視化し、その影響を評価する方法の開発を行っている。いずれも、人工衛星からのデータを直接受信し、問題解決のアルゴリズムを開発する研究であり、モスクワ大学と緊密に連携を取りながら行っている。

図1の事例(2013年4月14-15日)は、大陸の低気圧で黄砂が発生して、そのまま移動。その前に高気圧があり、そこに汚染物質があるので、黄砂は汚染物質に取り込まれ、その汚染物質が日本に向かって動き始めている様子が大変よく分かる。



工藤 純一教授  
くどう●じゅんいち

環境情報学 デジタル画像理解学



Aqua-MODISによる (2013.04.14)

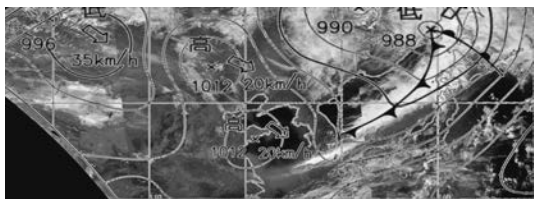


図1 : Aqua-MODISによる (2013.04.15)

《主な研究テーマ》

- 大規模森林火災の管理による二酸化炭素削減構想
- IKONOS衛星画像の融合処理に関する研究
- 大規模画像データベース構築に関する研究
- PM2.5を含む越境大気汚染や黄砂の衛星画像可視化研究

Division of Geoscience and  
Remote Sensing

電波科学による  
防災・減災と環境保全

電波を利用した地球観測には衛星・航空機合成開口レーダー(SAR)や地表測定用地中レーダ(GPR)など多様なレーダー装置が利用されている。私達は電波で地中を視るGPRと衛星から観測するSARを組み合わせて、環境保全を目的として地下水や土壌水分を計測する研究をモンゴル、ロシア、中国、韓国などの東北アジア地域を対象に行ってきた。一方、最先端GPR技術を利用して我々が開発したALIS(エーリス)はカンボジアで80個以上の地雷を除去する成果をあげている。国内では地表設置型合成開口レーダー(GB-SAR)による地滑りモニタリングを地震で被災した栗原市、南阿蘇村で実施している。また津波被災者捜索、復興関連の遺跡調査へのGPR技術の供与など、電波科学による積極的な防災・減災への取り組みを続けている。またレーダーによる社会インフラや建物の安全性評価を進めている。



佐藤 源之教授  
さとう●もとゆき

電磁波応用工学 地下電磁計測



GPRによる地下水計測  
(モンゴル・トール川流域)



カンボジア地雷原で活躍する  
ALIS



GPRによる遺跡計測  
(埼玉県・さきたま古墳)

《主な研究テーマ》

- カンボジア地雷除去
- GPRによる遺跡調査、震災復興支援
- GB-SARによる地滑りモニタリング
- SARとGPRを組み合わせた地下水・土壌水分計測

## 地表設置型合成開口レーダ (GB-SAR) と地中レーダ(GPR)による地中・建築物の内部イメージングの研究

電波を利用した地表設置型合成開口レーダ(GB-SAR)と地中レーダ(GPR)の研究を行っている。これらのレーダを建造物の壁や空港の舗装体に対して用いることで、非破壊で内部の損傷を発見することができる。また、地面に向けて用いる地雷探知では、地雷形状が可視化され、従来手法より効率的な地雷発見が可能となる。より正確な情報を得るために、レーダ用アンテナの設計開発、受信信号の偏波校正や、観測機器を走査する際の位置認識精度の向上を行う。これらの手法を測定対象に応じて適用することで、高精度なイメージング手法を開発する。



菊田 和孝 助教  
きくた ● かずたか  
計測工学



壁面透過型レーダシステム。  
壁に設置し、走査することで破損個所を特定できる。

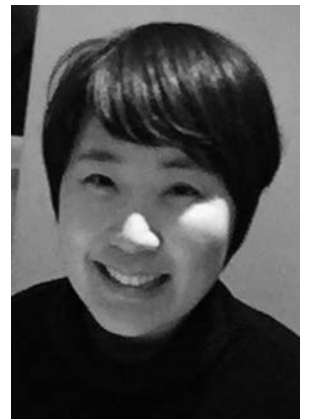


アレイ型地中レーダ(GPR) “やくも”。  
空港の舗装体内部の劣化個所などを特定できる。

## 中国共産党の一党体制下における 人民法院の政治制度としての役割

中国の司法機関である人民法院は、独立して司法決定を出すことができず、中国共産党に従属的な機関であると位置づけられてきた。このような中国共産党と人民法院の権力関係に変化はないものの、1980年代以降、人民法院は紛争処理の役割を担い、また、行政機関の監督機能を付与されるなど、その重要性は増している。

中国共産党は人民法院をどのように機能させようと試みてきたのか、そしてその結果、両者の権力関係はどのように変容したのであろうか。私の研究は、中国における政党と司法の権力関係を事例に、権威主義体制における司法機関の政治制度としての機能と権威主義体制が持続するメカニズムを明らかにしようとするものである。



内藤 寛子 助教  
ないとう ● ひろこ  
現代中国政治 比較政治



中国は民主化するのか？



いよいよ裁判が始まる。裁判所に五星(中国共産党の印)が光る。

### 《主な研究テーマ》

- GB-SAR による災害時の建造物検査
- GPR による地雷探知
- GB-SAR と GPR を組み合わせた空港滑走路モニタリング

### 《主な研究テーマ》

- 権威主義体制が持続するメカニズム
- 中国共産党と人民法院(司法機関)の権力関係
- 権威主義体制における司法機関の政治制度としての役割

Department of the Uehiro Tohoku  
Historical Materials Research

近世日本列島の  
経済交流を明らかにする

私は、18世紀から19世紀にかけての日本経済の歴史について研究をしている。研究方法は、当時の文献資料(「古文書」)の内容を具体的に分析することから始まる。また、文献だけではなく、フィールドワークやインタビューも含めて、豊かな歴史像の構築を目指している。現在は、①経済都市大阪がどのような歴史的経過を歩んでいくのか、②日本海航路を利用した商業活動(北前船)について、③宮城県の地域史分析、の3点を中心に取り組んでいる。日本列島のさまざまな地域が経済的につながっていたことを実証し、当時の人々のありようを考察する。これらをもとに、新しいアジアの経済史を描きたい。



荒武 賢一朗 准教授  
あらたけ けんいちろう  
日本近世史 経済史 都市史



江戸時代の「客船帳」  
(山形県立博物館)



江戸時代の商家(静岡県湖西市)

《主な研究テーマ》

- 近世都市をみる視点
- 沿岸社会と経済交流の歴史
- 日本列島市場論の提起と近世流通市場

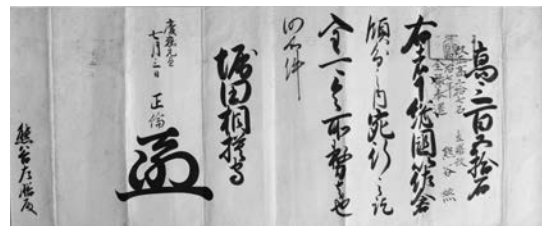
「家」をめぐる人々の行動・意識から  
日本近世社会を捉える

父子直系で継承され、永続することが志向される「家」は、近世社会に存在した多くの身分集団において基礎単位となっていた。幕府や藩といった権力機構も、個別の「家」々が縦に結合し、全体としては主君の「御家」として観念されていた。そのため、主君の権力を支える家臣たちの「家」の存続は、その「家」の家族・親類だけでなく、権力機構の安定的な運営のうえでも重要な課題となっていた。私は、大名家臣団を対象に、「家」をめぐる生じる多様な動き(権力側の施策、家臣側の行動)に着目し、近世武家社会の構造を分析している。なおこの視角は、村や町といった他の身分集団を観察する際にも援用できるのではないかと考えている。



藤方 博之助教  
ふじかた ひろゆき  
日本近世史 家族史 武家社会論

古文書調査の様子(熊谷家文書調査、2013年9月撮影)。



秩禄奉還についての書き込みがある知行宛行状(熊谷家文書)。幕藩体制の終焉を物語る。

《主な研究テーマ》

- 大名家臣層の「家」
- 近代の士族と旧大名家・旧領
- 大名飛地領における地域運営と支配の実相(特に出羽村山地域)

## 江戸幕府はなぜ260年余り続いたか —近世日本の統治構造を明らかにする

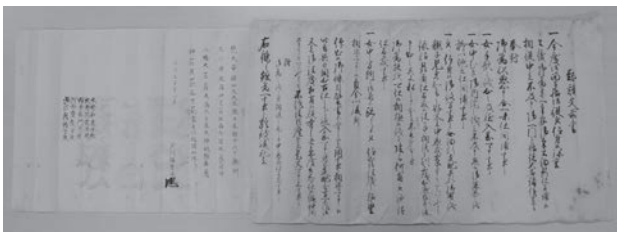
江戸時代の「国家官僚」といえる旗本という存在の研究を通じて、江戸幕府の統治構造を追究している。国家官僚といっても言うまでもなく現代と違い、旗本は武家領主として徳川将軍から拝領した知行地をもとに官僚として職務を遂行していた。したがって、江戸幕府の統治体制の全体構造にアプローチするには、江戸幕府の官僚機構と領主支配のあり方を連関させて検討することが重要となる。また、江戸幕府の統治構造を捉える上では、その官僚制の特徴を、西洋の官僚制との比較だけでなく、東アジアの官僚制のあり方との比較も検討しながら追究することが不可欠と考えている。



野本 禎司助教  
のもと●ていじ  
歴史学 日本近世史 地域史



名主らが建立した幕府代官の顕彰碑  
(山形県東根市)



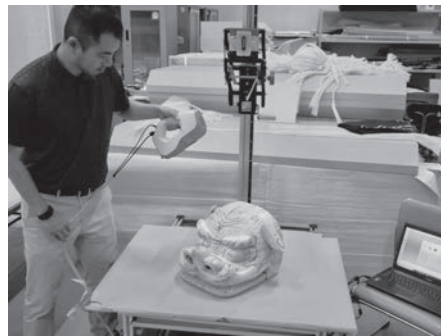
旗本が幕府役職就任時に提出する血判誓詞  
(江戸城多聞櫓文書、国立公文書館内閣文庫)

## 三次元計測技術を用いた無形民俗 文化財の（事前）復興に資する 災害人文学的調査研究

3D スキャナー等を用いて、祭礼や民俗芸能で用いられる祭具（獅子頭や祭礼船など）の三次元計測を行っています。これらを保存し、データベース化することで、災害等による損壊時に際しても迅速な復活を後押しすることができると考えています。そうして無形民俗文化財ひいてはコミュニティの災害からの早期復興に資するための研究を推し進めています。



福田 雄助教  
ふくだ●ゆう  
社会学 災害研究



3D スキャナーによる獅子頭（規格品）の三次元計測の様子



デジタルカメラを用いた祭礼船の三次元計測調査の様子（和歌山県串本町）

### 《主な研究テーマ》

- 旗本の領主支配と家臣団の再生産構造
- 江戸と周辺地域の関係性とその史的展開
- 幕府領における郡中惣代層の政治的活動

### 《主な研究テーマ》

- 三次元計測技術を用いた無形民俗文化財の保存事業および三次元データベースの構築
- 東日本大震災およびスマトラ島沖地震をめぐる記念行事のフィールドワーク
- 東日本大震災およびスマトラ島沖地震をめぐる震災遺構の比較社会学





Unit for the collaborative study  
on the environment and resources  
of Northeast Asia

東アジアにおける  
国際分業構造の変化と環境問題

世界経済成長の中心が「西から東へ」移行するに伴い、資源エネルギーの消費中心も「西から東へ」移行している中、東アジア地域の資源、貿易、投資など社会経済協力が世界経済回復へ重要な役割を果たすことになる。域内貿易関係が一層強化された東アジア地域において、国際分業・協力関係と資源の持続的・共存的利用の可能性を把握するための調査研究を続けている。



金丹 特任助教  
きん●たん  
環境経済 地域研究



金鉱山開発により変貌した小山(内モンゴルでの現地調査)



《主な研究テーマ》

- 東アジア地域における国際分業の進展
- 国際貿易を通じた相互依存関係と環境負荷構造分析
- 都市における環境汚染問題

根室市ノツカマフの海岸。海岸沿い崖の丸い突起はすべて、海底噴火の証拠である枕状溶岩。これら岩石が海岸沿いの崖を作る。(撮影：平野直人)



## 各種研究員の紹介

### 各種研究員の研究

#### 学術研究員

**宮後裕充** みなじり●ひろみつ  
環境政策論

日本の越境大気汚染外交と科学の関係を、科学者の越境酸性雨問題への対応を事例に分析している。

**田中利和** たなか●としかず  
生態人類学 地域研究

シベリアのサハにおける人と環境の相互作用に関する研究をアフリカとの比較の視点を交えて研究している。

**是恒さくら** これつね●さくら  
現代美術

アラスカや東北各地の捕鯨、漁労、民俗についてフィールドワークと採話をを行い、リトルプレスや刺繍、造形作品として発表する。

**矢口啓朗** やくち●ひろあき  
国際関係史

19世紀のヨーロッパ国際秩序がどのようなメカニズムで平和的に機能したのか、ロシア外交の視点から研究している。

**Anwer Sayed Abelhameed Ahmed**

Antenna Design

My current research work focuses on design, developing, and testing of antennas for nondestructive archeological survey systems based on electromagnetic waves.

**山崎大志** やまざき●だいし  
進化生態学

日本沿岸を中心とした東アジア海域において、海産無脊椎動物の種多様化プロセス解明を進めている。

**井上瑠菜** いのうえ●るな  
日本美術史

近世日本における人物画の研究に取り組んでいる。絵師によって人物の姿がどのように描かれ、継承されたのかを明らかにする。

**堀内香里** ほりうち●かおり  
モンゴル史

主に現地档案史料を使い、清代モンゴル遊牧民社会における統治様態の解明を目指している。

**大野ゆかり** おおの●ゆかり  
理論生態学

写真を用いた市民参加型のマルハナバチの分布調査を行っている。モデルを使用して分布の推定も行う。

#### 専門研究員

**李善姬** LEE●SUNHEE  
社会人類学

女性の事例研究を通して日韓のジェンダー問題及び移民問題の研究をしている。



## 『東北アジア研究』

### 第23号 (2018) 目次

#### ●論文

- 連続性への希求—香港新界沙田W氏族譜の内容分析を通してみる系譜意識／瀬川昌久  
 「満洲国」以前の東部内モンゴルにおける近代日本の医事衛生調査／財吉 拉胡  
 Land improvement under conditions of permafrost: melioratsiia and intended forms of environmental change in Soviet Yakutia / HABECK Joachim Otto, YAKOVLEV Aital Igorevich

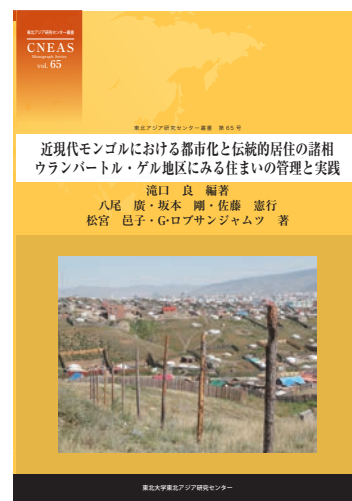
#### ●書評

- 高倉浩樹編『寒冷アジアの文化生態史』古今書院、2018年／本多 俊和



## 『東北アジア研究センター叢書』

- 第62号 聖書翻訳を通して見るモンゴル - 東北アジア宗教文化交流史の文脈から -  
 (滝澤克彦・芝山豊編、2017)  
 第63号 プロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌  
 -20世紀初めのエンチウ、ニヴフ、ウイльта -  
 (井上紘一編著 高倉浩樹監修、2018)  
 第64号 岩出山伊達家の北海道開拓移住—「吾妻家文書」を読む—  
 (友田昌宏・菊地優子・高橋盛、2018)  
 第65号 近現代モンゴルにおける都市化と伝統的居住の諸相  
 ウランバートル・ゲル地区にみる住まいの管理と実践  
 (滝口良 (編著) 八尾廣・坂本剛・佐藤憲行・松宮 邑子・G. ロブサンジャムツ、2018)



## 『東北アジア研究センター報告』

- 第24号 永久凍土と文化 - 地球温暖化とロシア連邦サハ共和国 [ヤクーチア] (ロシア語)  
 (高倉浩樹・飯島慈裕・ヴァンダ・イグナティエヴァ・アレクサンドル  
 ・フョードロフ・後藤正憲・田中利和編、2019)

## 『東北アジア学術読本』

- 第6号 地中レーダーを用いた遺跡探査— GPR の原理と応用  
 (佐藤 源之・金田 明大・高橋 一徳編、東北大学出版会、2016)  
 第7号 東北アジアの自然と文化 (塩谷昌史・後藤章夫編、東北大学出版会、2018)  
 第8号 古文書がつなぐ人と地域 —これからの歴史資料保全活動— (荒武 賢一朗・高橋陽一編、東北大学出版会、2019)

## 『東北アジア研究専書』

- 第20号 震災後の地域文化と被災者の民俗誌—フィールド災害人文学の構築 (高倉浩樹・山口睦著、新泉社、2018)  
 第21号 幕末維新期の日本と世界 —外交経験と相互認識—  
 (友田昌宏 (編者)、西澤美穂子、山添博史、ル・ルー ブレンダン、  
 ベル テッリ・ジュリオ・アントニオ、森田朋子、上白石実著、吉川弘文館、2019)

## その他の関連著書

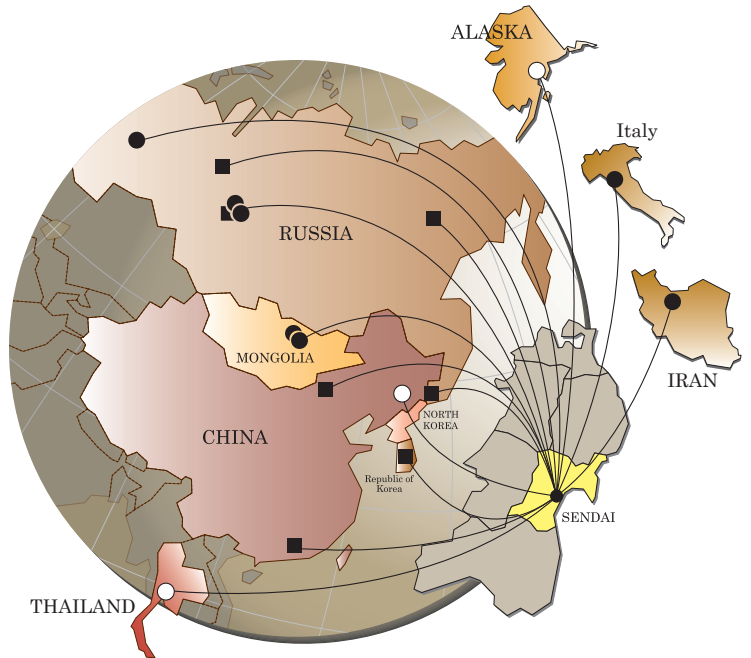
- 千葉 聡 「歌うカタツムリ—進化とらせんの物語 (岩波科学ライブラリー)」 (岩波書店、2017)  
 Hiyyama Tetsuya, Takakura Hiroki 「Global Warming and Human - Nature Dimension in Northern Eurasia」 (Springer, 2017)  
 Susan Bouterey and Lawrence E. Marceau (eds.)  
 「Crisis and Disaster in Japan and New Zealand: Actors, Victims and Ramification」 (Palgrave Macmillan, 2018)  
 Masayuki Tanimoto and R. Bin Wong (eds) 「Public Goods Provision in the Early Modern Economy :  
 Comparative Perspectives from Japan, China, and Europe」 (University of California Press, 2019)  
 関谷雄一・高倉浩樹 「震災復興の公共人類学：福島原発事故被災者と津波被災者との協働」 (東京大学出版会、2019)



# 国際学術交流

## [ 学術協定による海外の学術機関等との連携強化 ]

締結年月日	相手方機関名
1992. 8.10	● ロシア科学アカデミーシベリア支部
1999. 1.12	○ アメリカアラスカ大学
2000. 8.21	● モンゴル科学アカデミー
2000.10. 2	■ モンゴル科学技術大学ジオサイエンスセンター
2001. 3. 1	● 中国吉林大学
2001. 6.25	■ 中国広東省民族宗教研究院
2001.11.16	● モンゴル科学技術大学
2002.10. 1	■ ロシア科学アカデミー・シベリア支部 V.N.スカチョフ森林研究所
2003. 7. 4	● ロシア連邦ノボシビルスク国立大学
2005. 9. 1	■ ロシア科学アカデミー極東支部経済研究所
2008. 4. 1	■ 中国内蒙古師範大学蒙古学学院
2008. 4.25	■ 韓国高麗大学校中国学研究所
2008. 4.25	■ 韓国高麗大学校日本研究センター
2008. 9.22	■ 中国内蒙古大学蒙古学学院
2009. 8.21	● イタリアフィレンツェ大学
2009. 8.25	○ イランテヘラン大学
2009. 9.30	■ ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・ 北方民族問題研究所
2011. 9.28	■ 中国内蒙古師範大学旅游学院
2013. 3. 1	○ ドイツ ドイツ航空宇宙センター
2014. 2.25	■ 中国 中央民族大学蒙古語言文学系
2014. 9.30	○ ロシア連邦 ロシア国立高等経済学院
2016. 4. 1	■ ロシア連邦 ロシア科学アカデミーシベリア支部 人文学・北方民族問題研究所 (学生交流に関する覚書)
2016. 8.15	■ ロシア連邦 ロシア科学アカデミーシベリア支部 ヴィノグラードフ記念地球化学研究所
2017. 3.12	■ ロシア連邦 ロシア科学アカデミー森林生態生産 研究センター
2018. 5.21	■ ロシア連邦 モスクワ国立大学情報数理学部



●:センターが世話部局となった大学間協定    ○:センターが協力部局となった大学間協定    ■:部局間協定

## ロシアとの交流

東北アジア研究センターは、ロシアの研究教育機関とさまざまな学術交流を進めている。そのうちノボシビルスク国立大学と本学が2003年に締結した大学間学術交流協定では世話部局をつとめている。交流活動の一つとして、本学ロシア交流推進室や文系諸部局教員の協力を得て、2009年から同大人文学部東洋学科で日本アジア講座を開催してきた。これは、同大で日本語・日本文化を学ぶ学部生・大学院生を対象に、日本・アジアを専門とする本学教員が日本語で講義を行うものである。また2013年度から仙台で実施している研究交流会「日露ワークショップ」では、両校の教員による講演と、大学院生による研究発表が英語で行われ、学生に国際交流の機会を提供している。本センターが様々な場面で協力を進めるロシアの研究教育機関は、主要なパートナーとなっている。



ノボシビルスク大学新校舎



日本アジア講座 (2015年)

## [ 研究者の国際交流 ]

外国人研究者の招聘・研究者の海外派遣 (延べ人数)	(単位:人)							
	年度別	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
外国人研究者の招聘		15	13	26	33	32	32	35
研究者の海外派遣		78	87	78	76	77	81	94

## [ 国際シンポジウム等の主催・参加状況 ]

	(単位:件)							
	年度別	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
主催件数		2	6	11	10	14	16	23
参加件数		36	39	41	47	43	64	83



[ 公開プログラム ]

2018 年度公開講演会

地球生命の起源と進化：ヒトの誕生と現在から近未来の課題まで

2019年2月23日(土)、東北アジア研究センター公開講演会「地球生命の起源と進化：ヒトの誕生と現在から近未来の課題まで」(講師：丸山茂徳 先生)が、一般社団法人日本地質学会、東北大学総合学術博物館、NPO 法人地球年代学ネットワークの後援で、東京エレクトロンホール宮城 601 会議室で開催された。高倉センター長の講演会の趣旨説明に引き続き、世話役(辻森)が講師の略歴を紹介した。丸山先生は、1949年徳島県生まれ。1980年名古屋大学で理学博士号を取得後、富山大学教育学部助手、スタンフォード大学客員研究員、東京大学教養学部助教授、東京工業大学大学院理工学研究科教授等を歴任し、現在は東京工業大学特命教授。地質学から地球惑星科学、地球生命史、生命の起源と進化までを含む超学際研究を行っている。2000年米国科学振興協会フェロー選出、2006年紫綬褒章受章、2014年アメリカ地質学会名誉フェロー(日本人で4人目)に選出、16,300回を超える論文の高被引用数(2019年5月Scopus調べ)など華々しい研究生生活を歩んでこられた。全く新しい発想で大胆な仮説・モデルを世界に提唱しながら、次世代の人材育成と教育にも大きく貢献されてきた。今回の講演会は、その前日までの東北大学知のフォーラム・国際ワークショップ「Continental Amalgamation and Stabilization of Northeast Asia: Stories before the Stone Age」(世話役：辻森、於片平キャンパス)に関連し、同ワークショップでの基調講演とセッショントークの2つに加えて、3つめの講演としてお願いしていたものだった。



満席となった会場で、講演は「原始生命、地球が誕生した直後と同じような生物というのは今もどこかで生まれ続けているのか？」など、単純な5つの問いについて、聴衆に意見を求める対話形式で始まった。講演は地球生命史の先端的な研究、人類の誕生と進化の生物学的な側面と文明の歴史、多軸国家群のなかでの文明の近未来像など多岐にわたった。様々な意見に柔軟な応答を展開しながらの講演スタイルは、約200名の聴衆を楽しませ、エネルギー溢る講演を皆が最後まで聞き入った。講師の研究・教育への情熱と個性が十分に発揮された内容であった。

講演後の挨拶を終えた後も丸山先生への質問の列が出来た。熱心な中学生から、地球を救うために(環境問題などから)自分に何ができるか?という趣旨の質問に対して、「一生懸命勉強して、科学者になりなさい。」と答えた丸山先生が実に印象的であった。会場を後にしてから、講演を聴きにきた複数の学生らと定禅寺通りのカフェで歓談した。学生個々の研究テーマや興味に情熱的にアドバイスする姿を観ながら、初めて丸山先生にお会いした25年前を思い出し、研究・教育に真摯な姿勢で向き合うことを改めて肝に銘じた。



伊達市噴火湾文化研究所・東北大学東北アジア研究センター

第9回学術交流連携講演会

地域研究とその成果の活用を目指し、北海道の伊達市噴火湾文化研究所と東北大学東北アジア研究センターは毎年講演会を開催しています。

日時：2018年10月26日 18:30～20:45

会場：だて歴史の杜カルチャーセンター

- 講演1 「深海底へのサンプルリターン—現在と過去の太平洋深海底へ—」  
講師：平野 直人(東北大学東北アジア研究センター地球化学研究分野准教授)
- 講演2 「慰霊祭・追悼式の社会学—津波記念行事にみられる災禍との向き合い方—」  
講師：福田 雄(東大東北アジア研究センター災害人文学研究ユニット助教)



2019 年度シンポジウム

Bringing the State Back in: New Frontiers of Governance Studies in China

日時：2019年3月3日(日)

会場：日本橋ライフサイエンスビルディング



# データ編

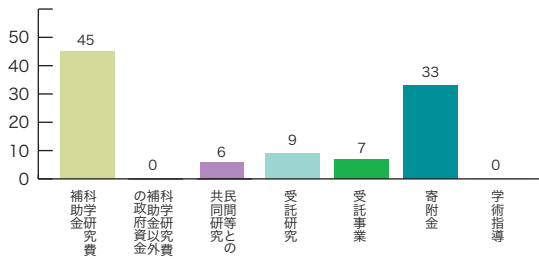
(2020年1月現在)

・職員数(現員)	教授 10名、准教授 6名、助教 9名、計 25名	・施設面積	2,843 m <sup>2</sup>
・図書室	蔵書数概算 11,000冊 受入雑誌数 和雑誌 286種 洋雑誌 86種		

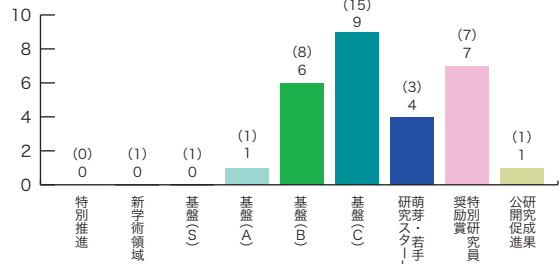
## [ 競争的資金獲得件数および採択額 ]

○2018年度 計 100 (百万円)

○種目別獲得額(単位:百万円)

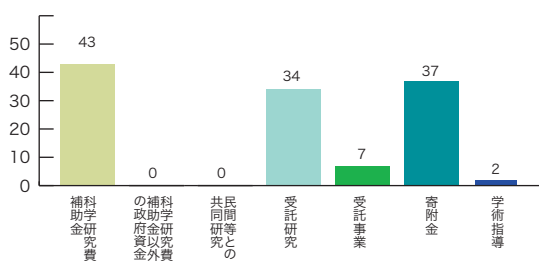


○科研費種目別(申請)採択数合計

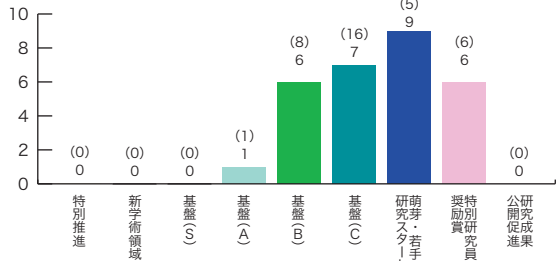


○2017年度 計 123 (百万円)

○種目別獲得額(単位:百万円)

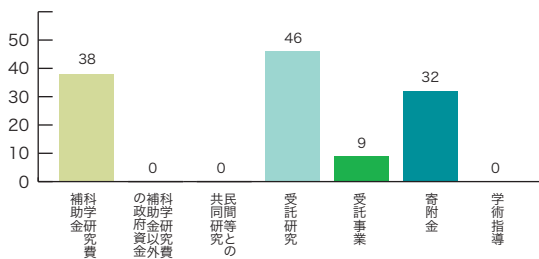


○科研費種目別(申請)採択数合計

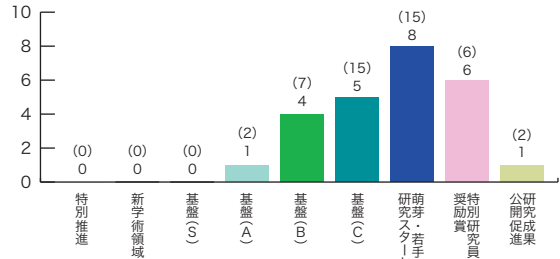


○2016年度 計 125 (百万円)

○種目別獲得額(単位:百万円)

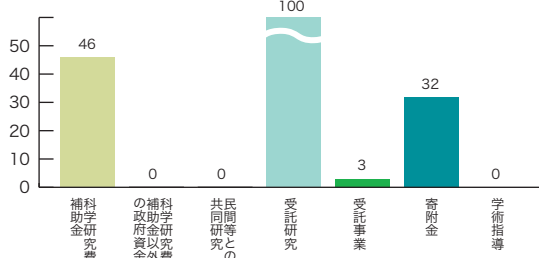


○科研費種目別(申請)採択数合計

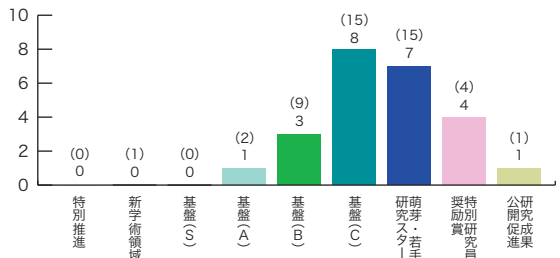


○2015年度 計 181 (百万円)

○種目別獲得額(単位:百万円)



○科研費種目別(申請)採択数合計



## [ 部局別大学院生の受入状況 ]

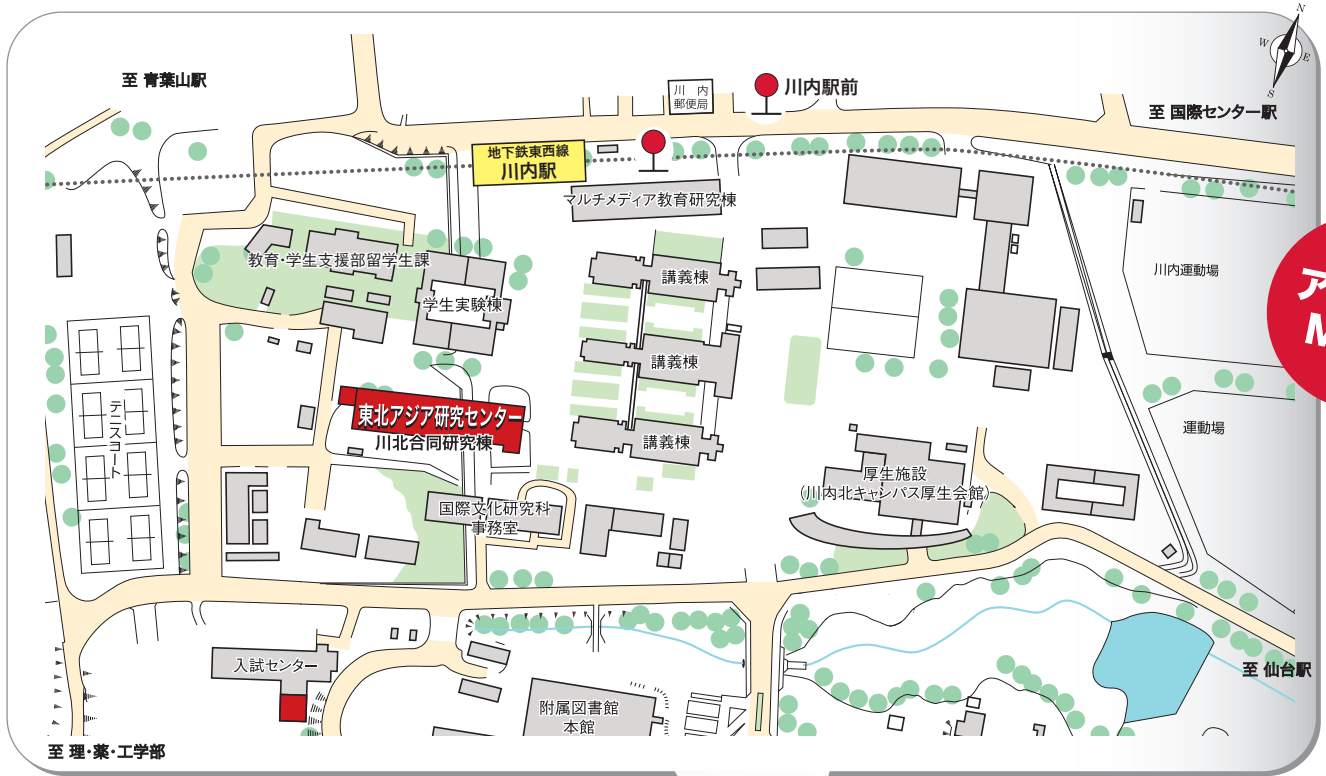
※東北アジア研の教員が「指導教員」となっている大学院生の人数

(単位:人)

(単位:人)

学生別	部局別	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	合計
1. 博士後期	文学研究科	1	1	2	3	1	3	3	2	1	0	17
	理学研究科	0	1	1	4	4	3	3	2	3	3	24
	工学研究科	2	1	2	1	0	0	0	0	0	0	6
	国際文化研究科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	情報科学研究科	1	1	3	3	3	2	0	0	0	0	13
	生命科学研究科	1	1	1	1	4	5	3	4	7	8	35
	環境科学研究科	21	24	20	14	12	12	14	12	12	13	154
	小計	26	29	29	26	24	25	23	20	23	24	249

学生別	部局別	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	合計
2. 博士前期	文学研究科	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	4
	理学研究科	2	7	7	5	8	3	5	7	5	10	59
	工学研究科	5	5	5	6	0	0	0	0	0	0	21
	国際文化研究科	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	情報科学研究科	2	3	1	0	0	0	0	0	0	1	7
	生命科学研究科	0	1	2	2	6	5	6	6	9	8	45
	環境科学研究科	11	12	14	12	10	6	4	5	12	15	101
小計	20	28	29	27	26	14	15	19	26	34	238	

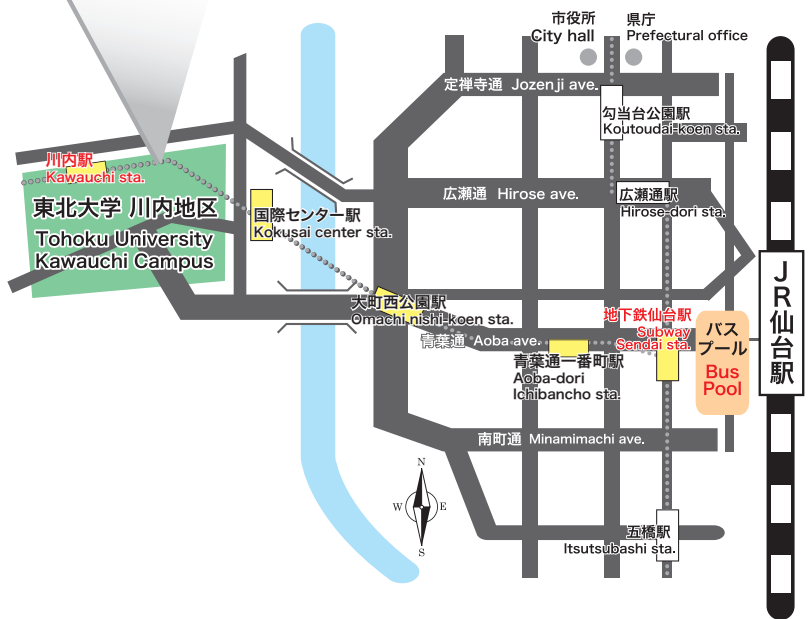


## Kawauchi Campus

### 仙台駅からのアクセス

**仙台市営地下鉄**  
 東西線「川内駅」下車  
 (仙台市営地下鉄東西線「仙台駅」～「川内駅」  
 「南1」出口より徒歩2分 乗車時間：約6分)

**仙台市営バス (15番のりばから)**  
 「川内駅前」下車  
 739・S839系統 「広瀬通経由 交通公園循環」  
 730系統 「広瀬通経由 交通公園・  
 川内営業所 行き」  
 (仙台市営バス「仙台駅15番のりば」～「川内駅前」  
 所要時間：約13分)



2020年3月31日発行

編集 東北アジア研究センター広報情報委員会  
 コラボレーション・オフィス

編集協力 (有) まちのほこり研究室

デザイン (有) グリッド

写真協力 齋藤秀一写真事務所

印刷 小宮山印刷工業株式会社

発行  
 東北大学東北アジア研究センター  
 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41番地  
 Tel : 022-795-6009 Fax : 022-795-6010  
 URL : <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>

# CNEAS

Center for Northeast Asian Studies

Tohoku University



東北大学

## 東北大学 東北アジア研究センター

〒980-8576  
宮城県仙台市青葉区川内41番地  
TEL (022) 795-6009  
FAX (022) 795-6010  
<http://www.cneas.tohoku.ac.jp>

2020年3月31日発行